《資料紹介》

東北師範大学日本研究叢書からみる日本問題の最新研究

――『偽満歴史文化与現代中日関係』（上・下）を中心に――

李　　青

はじめに

近年、日本に関する研究は中国の専門研究機関を中心に確実に成果を上げている。特に旧植民地だった地域の研究は1980年代を皮切りに、資料公開や解禁に伴い、斬新な研究が増えつつある。本稿は日本研究で名を馳せている東北師範大学日本研究所が主体となる最新研究に注目したい。東北師範大学日本研究所は1964年に設立された、中国における日本研究の重鎮とも言われている研究機関である。本稿で対象となる研究は日本の国際交流基金の援助を受け、2006年から近代日本の多方面的分析を研究目的としてスタートした。９年間の研究の集大成として2007年から『東北師範大学日本研究叢書』（以下は叢書という）の第一冊目の成果を上梓してから、順に出版活動を継続し、2015年１月に、11冊目の専門書を上梓して、このプロジェクトに一区切りをつけた。本叢書は同時に中国の教育部人文社会科学研究企劃基金も得た。このプロジェクトは東北師範大学日本研究所教授である尚俠を主編にして、12名の研究者によって組織された。同研究所の中堅研究者と若手研究者を中心にそれぞれのテーマについて一冊ずつ専門書を著すか、共著という形で研究成果を出版した。研究内容は、日本文化と文学、近代日本と経営、日本の歴史と政治などをはじめ、多領域に亘る。叢書は商務印書館より出版された。

以下では叢書シリーズの全体の紹介とプロジェクトに参加した全員の論文集として纏められた『偽満歴史文化与現代中日関係』（上・下）を見ていきたい。

一　叢書シリーズの全体像

まず出版の順にタイトルと内容を簡単に要約しておきたい。

①『稲森和夫』（2007年８月）鐘放　著

本書は文化の角度から日本の実業家、京セラ・第二電電創業者の稲森和夫をめぐり、彼の経営理念と経営哲学について、論述している。

②『近代日本国家意識の形成』（2008年４月）陳秀武　著

著者は日本思想史、日本政治思想史を専門としている。本書は日本が藩から近代国家に変化する際の意識の変化及び発展の道のりについて論述し、新しい国家意識が日本の近代史と対外関係に果たされた役割について解読した。

③『日本近代地方自治制度の形成』（2008年４月）　郭冬梅　著

世界史を専門とする著者は日本の近代における地方統治と地方自治伝統について、その形成の原因、特色などを分析し、独自の見解を示している。

④『独占から競争まで――日米欧電子市場化改革の比較』（2009年３月）井志忠　著

本書はタイトルの通り、日米欧電化製品市場改革の比較を通じて、熾烈な競争市場から共通性と一定の規律を見出した。中国の電化製品体制の改革に文献的な史料を提供した。

⑤『日本円の国際化と東亜貨幣合作』（2010年４月）　付麗頴　著

著者は日本円を軸にした円の国際化における発展と趨勢について分析した。

⑥『戦後日本の漢字における政策研究』（2011年３月）　洪仁善　著

言語学を専門とする著者は、言語学と歴史的な研究法を駆使し、戦後日本の当用漢字、人名に使われる漢字、JIS漢字における政策的な変遷の軌跡を漢字の種類、音読み、字体の三つ方面から解説した。

⑦『日本女性文学史』（2012年12月）　劉春英　著

著者は日本文学の専門家である。日本女流文学について古今に亘る文学の流れを細かく整理し、各時期の代表的な女流作家の文学について論述した。

⑧『村上春樹小説における芸術についての研究』（2013年７月）　尚一欧　著

著者は一貫して村上春樹を研究している。本書は言語的に芸術的な技法及び人物描写などに重点に置きながら、村上春樹の小説の魅力を考察した。

⑨『偽満歴史文化と現代中日関係』（上・下）（2014年１月）　尚俠　主編

本書は「満洲国」の建国思想から見られる植民的な本質、法律構造、金融貿易、地方自治、電力産業、在満作家、宗教政策などの角度から満洲国の歴史を再整理した最新の研究である。

⑩「『満洲評論』及びその時代」(2015年1月)　祝力新　著

著者は多くの資料を駆使し、『満洲評論』誕生初期の思想根源を論証した。雑誌の各時代の編集人によって編集主張の変化を追いつつ、「満洲青年聯盟」、協和会とその刊行物に現された文学的な要素、移民問題などについて科学的に整理した。近年、中国において、『満洲評論』研究では得がたい好著だと好評を博している。

二　『偽満歴史文化与現代中日関係』(上・下)からみる最新研究

11冊の中で『偽満歴史文化与現代中日関係』(上・下)はプロジェクトに参加するほぼ全員の研究を重点的に纏めた形で刊行している。

(上)は五人の執筆者が分担している。第一編は陳秀武著「偽満洲国における“建国精神”の植民地本質」である。論文は五つの部分からなっている。著者は「満洲国」の初代総理である鄭孝胥が1932年に著した『“満洲建国”溯源史略』に基づき、鄭孝胥日記や他の資料も借りながら、「満洲国」建国の史観、建国理念が如何なるものなのかを検証した。なお、「建国」に伴う「政府」の公文書である各種『政府公報』及び1937年総務庁弘報処発行の半月刊雑誌『弘宣』の創刊号の内容を分析している。早期の協和会と建国精神の関わり、「東亜共同体論」の提起と植民地情緒を批判した。

第二編は鐘放著「偽満洲国法律の畸形特徴について」である。著者は三章を立て、論を展開している。「満洲国」成立後に国としての承認をめぐり、国民党の対日政策、ソ連や他のごく一部少数の「満洲国」を承認した国家の政策について、史料に基づき、国際情勢を交えながら、分析した。当時の国際法に照らし合わせ、過去の研究を踏まえつつ、非合法性を強調した。第二章と第三章は「満洲国」建国後に作られた“基本法”と“教育法規”の大きな枠組みの中で関連法案の頒布を分析している。いずれの法案も日本による主導権に基づくものであり、傀儡性の強い物と結論づけた。

第三編は付麗頴著「偽満洲国金融貿易の従属性」である。論文は五章からなっている。「満洲国」建国後に、「満洲国」に金融システムが迅速に持ち込

まれた。中央銀行の設立、金融政策の強化、貯蓄政策がもたらした経済効果及び建国初期の対外貿易について論述した。

第四編は郭冬梅著「偽満洲国の地方財政」である。論文はは五章からなっており、「満洲国」建国前後の地方統治構想と中央の地方機構の変遷をはじめ、吉林省を調査地にして、「満洲国」建国後における省、県、町、村の財政について考察した。

第五編は井志忠著「偽満洲国の電力産業」である。論文は三章からなっている。満洲電業株式会社、「満洲国」時期の豊満水力発電所を中心に、日本の経済統治による電力独占状況を論証した。

『偽満歴史文化と現代中日関係』（下）は文学、言語、宗教を中心に五人の学者によって執筆されている。

第一編は劉春英、馮雅の論文「新京時代の日本作家」である。論文は当時「満洲国」の首都である新京（現在の長春）文壇について、活躍していた作家と雑誌の種類、内容について詳しく紹介、分析した。日本の代表的な作家については、以下のように項目を立てて論じている。（一）「北村謙次郎と満洲浪漫派」、（二）「山田清三郎と満洲文藝家協会」（三）「長谷川浚と“建国文学”」（四）「牛島春子と“民族協和”」（五）「檀一雄文学における北欧浪漫的特徴」、（六）「官僚作家藤山一雄」、（七）「林田茂雄の戯劇創作」、（八）「具島兼三郎の運命」、（九）「日本人作家と中国人作家の関係」。九人の作家はそれぞれ異なる理由で渡満し、異なる背景の下で、「満洲国」で文学活動をしていた。官僚や兼業作家もいれば、主婦作家もいた。政治的な背景や置かれた社会的な立場から、作家たちの人生観からきた物事の見方は当然ながら見解が異なる。しかしながら、彼らの書いた「満洲国」は当時の社会の世相を理解する一枚の鏡のような役割を果たしていたことは否定できない。中には人生経験や左翼的な思想の持ち主という立場上から、為政者への批判とも感じられる描写が読み取れる箇所もあると著者が指摘している。しかし、日本人作家には政治の制約を超えられることができず、ほとんどが政治に利用され、植民地の宣伝に一助する役割を果たした。

第二編は祝力新が著する論文「『満洲評論』及びその時代」である。『満洲評論』は1931年８月に創刊され、1945年７月に停刊した。「満洲国」において、もっとも長寿とも言われた雑誌の一つである。著者は『満洲評論』を読

みこなした上で、関連資料も丹念に集めた。論文の前半では『満洲評論』と同時期の新聞、雑誌の性格と比較しながら、その個性と価値、中日両国における研究状況と得られた成果を纏めた。後半では、『満洲評論』をめぐる内実について、科学的に検証している。特色として、政府経営の雑誌にも拘わらず、多様な思想を受け入れている。一貫して、共産主義とコミンテルン及び中国共産党に注目する姿勢を崩さなかった。その次に、時事評論に関する評論は作風が極めて伝統的であり、文体が緻密である。三番目に明白な政治的な色彩もないことである。総合雑誌の中で始終同様な経営方針を貫く点は、他の大衆紙や文藝雑誌にはまったく盛られないというのが著者の結論である。

第三編は洪仁善著「“満洲かな”と日本の言語植民地政策」である。「満洲かな」は漢字の上に日本語の仮名をふり、日本語風に中国語を読む方法である。論文は七章立てである。「満洲国」という植民地国では、特殊な方法で在満日本人が中国語を学ぶためであると同時に、「満洲国」内の中国人が同時に日本語を学ぶためであると、発案者が考えたという。著者は「満洲かな」を発案した曾恪を手がかりに、何故「満洲国」に「満洲かな」が必要なのか、史料をもって、「満洲かな」の変遷を論述した。しかし、著者は中国に固有な発音記号を無視してまで、「満洲かな」を発案する目的は日本語の普及のためであると指摘している。論文の後半は1940年に公表した『満語標音かな』の具体的な内容について検証し、標音することによってそれぞれの言語に齟齬をきたすことも指摘した。

第四編は尚一鷗の論文「村上春樹の“満洲情緒”の解釈」である。著者は村上春樹の長編小説『ねじまき鳥クロニクル』を取り上げ、ノモンハン事変を絡ませた小説を論じる題材にした。1991年、村上がプリンストン大学に客員研究員として招聘された。その際に大学の図書館にノモンハン事変の資料に触れ、戦争を題材にした長編小説の作成を手がけた。滞在1年目に１部と２部が執筆された。『ねじまき鳥クロニクル』第１部「泥棒かささぎ編」は1994年４月に新潮社から出版された。それまでに『新潮』1992年10月号～1993年8月号に掲載されていた。第２部「予言する鳥編」は1994年４月、第３部「鳥刺し男編」は1995年８月に同じ新潮社からそれぞれ出版された。

著者は村上文学では、初めて戦争等の巨大な暴力を本格的に扱っていると述べる。戦争は「満洲国」と関りのあるノモンハン事変に注目した。五章の

中で村上は戦争題材を意図する物については、歴史と現実問題からの思慮であり、日本社会に存在する危機も視野に入れていると指摘した。作品を通じて、日本とアジア大陸との悲劇を描き、自らの戦争認識を読者に読み取らせようとしているのではないかと著者は分析している。

第五編は呉佩軍の論文「偽満洲国の宗教信仰－カトリック教を中心に」である。五章立ての論文はカトリック教の東北における発展の歴史、布教の形態を中国、日本及び英文の資料に基づき、「満洲国」時期の様相を中心に論証した。「満洲国」が建国直後にローマ法王に認められた事実から、カトリック教会は始終保護され、政権と良好な関係にあった。論文の後半では海倫県海北鎮のカトリック教会の発展状況を例にして、カトリック教会と政治権力の相互利用関係を検証した。植民地東北地方の宗教の一側面を垣間見ることができた。

終わりに

『偽満歴史文化与現代中日関係』（上）の執筆者はいずれも東北師範大学日本研究所あるいは日本語学科の若手研究者である。中国語と日本語による「満洲国」時代の原史料を最重要視しつつ読破したことから、比較的正確に事実関係を論証できている。従来の結論重視より史料を読み解くことを重視している。

『偽満歴史文化与現代中日関係』（下）は最後の一編を除けば、（上）と同じ東北師範大学の学者による最新の研究成果である。「満洲国」時代の史料公開と発掘することによって、研究者に研究の良い材料を提供した。なお、政治的な側面から見ても、1990年代の後半から淪陥区（占領された地域）の文学を見直す動きに加え、研究の自由と幅の広さもある程度緩和されるようになった。このシリーズの研究はまさに、与えられた一定の自由の研究空間を利用し、史料を最重要視した優れた研究成果だと言えよう。プロジェクトに参加した学者たちはいずれも日本語を自由自在に理解することができる。長年日本の研究機関において、研鑽を重ねれば、問題の扱い方や史料の見方は合理的に考えられるようになる。しかし、中国で出版される際は、政治的な制約を多少受けざるを得ない部分はある。一部表現の仕方が政治的な標語を感じられ、植民地の本質の分析やイデオロギー的に限界が感じられる箇所が

あることは否定できないだろう。いずれにせよ、本叢書は最新資料の多くを使いこなした優れたシリーズ研究である。広く研究者に薦める価値がある。

（本学教授）